

うめわかづか
梅若塚

謡曲「隅田川」で有名な梅若丸を葬ったと伝えられる塚が、天然記念物の「お葉付銀杏」のある新方袋満蔵寺門前右側にいがたふくろまんぞうじの小高い丘にある。

梅若丸は今から一〇一五年前の應和三年、京都北白川に住む吉田少将惟房卿これふきと花子の前の子として誕生。七歳のとき勉学のため比叡山月林寺の稚児となった。十二歳のとき宗門の争いがあり、その難をさけて下山したが、このとき人買の信夫しのぶの藤太とうたにだまされて東国へ連れ出され、奥州への旅の途中この地へ来たとき、病となり足手まといとなったので、藤太は梅若丸を隅田川へ投げこんでしまった。幸い岸から川面にのびた柳の枝に首にかけていた「お守り」がからんで助かり梅若丸は岸にはい上がってつかれ伏していたところを村人に発見され、親切に介抱されたが、病は重く村人に身の素性を語り、

尋ね来て問はば答へよ都鳥

隅田川原の露と消えぬと

と、歌を詠みて息絶えた。時は円融天皇の御代天延元年（九七四）三月十五日である。村人は哀れに思いねんごろに葬り、塚に桜を植え供養をした。一方わが子の行方を尋ねてこの地にたどりついた母は、念仏の声にさそわれて塚の前で一周忌の法要に会い、わが子梅若丸の死を知り、供養のため髪をおろして、塚のそばに庵室をつくり梅若の冥福を念じた。祐閑ゆうかん

和尚おしょう（満蔵寺開山祖）は木像を彫って胎内に梅若丸が携えていた母の形見の守り本尊を納め、お堂を建ててこれを安置した。今も満蔵寺山門内の左手にある地藏堂に安置されている。

梅若塚については、東京都の史跡指定となっている墨田区の天台宗木母寺もくぼじがあるが、どちらが本末かいまもって不明とされている。「新編武蔵風土記稿」巻之二百七埼玉郡百間領、新方袋村につきの文がある。

「梅若社」もとは村民式右衛門と云者の宅地内、古隅田川堤の上にありしが、その家断絶して数年の後、享和元年当地へ移せし由 是世に伝ふる梅若塚の古跡にして、隅田村 木母寺にある梅若塚は当所の写なりと、伝ふれど、もとよりあかし證となすべき記録もなく……（後略）

このように東京都と春日部市に梅若塚の話が残されている。いずれが本分かは不明であるが、新方袋の名主山口家に應永三年（一三九六）に作成された「梅若塚略記」という版木が今も保存されている。

また三月十五日の梅若忌には地元の住民による春祈禱が古くから伝承されて行なわれている。また毎年四月十五日前後の日曜日には塚の前で宝生流囑託会有志が参集して、謡曲「隅田川」を奉納している。

昭和四十四年、梅若柳桜会が梅若丸供養碑を建立した碑面に

梅若のここにみまかり

千年へし今日いしぶみを

建ててしのばん

初出「広報かすかべ 昭和五十三年五月」かすかべの歴史余話